アメリカの国立公園の魅力を伝えるパークレンジャー

来訪者と自然をつなぐ、インタープリテーション

**アメリカには国立公園局が管理している国立公園が 59 箇所ある。
2004 年にアメリカの市民権を取得して以来、国立公園局パークレンジャーとして全米各地で勤務し、
現在はニューメキシコ州の国定公園（ナショナルモニュメント）（注1）で仕事をしているトッド久一氏に、
アメリカでパークレンジャーになった経緯、日々の業務、インタープリターの役割、
アメリカの国立公園の魅力などについて話を伺った。**

ミュアウッズ国定公園でのインタープリテーションの様子

トッド久一 氏

アメリカ国立公園局パークレンジャー

収録日：2023 年 10 月 19 日
収録場所：オンライン
インタビュアー：高野千鶴
（日本エコツーリズム協会事務局）

天職に出会う

――アメリカでパークレンジャーになった経緯を教えてください。

大阪の工業地帯で育ったこともあり、子どもの頃から自然という存在に惹かれてはいましたが、自然にかかわる仕事に就きたいとは全く考えていませんでした。学生時代に異文化に触れたい、他の国を見てみたいという思いから、アメリカの大学へ行き社会学を学びました。留学中にバスやヒッチハイクをしながらイエローストーンやグランドキャニオンを訪れた時の衝撃は今でも忘れられません。でもそういう自然のフィールドを仕事にしようという発想はありませんでした。卒業後はアメリカに残り、ユタ州の片田舎で色々な仕事をしましたが、アウトドア用品や本の販売を併設するコーヒーショップで長く働いていました。

転機は38歳の時で、たまたまアメリカの国立公園などでインターンを募集しているポスターを見つけ応募したことからです。パークレンジャーの業務を補佐するインターンとして3か月間働きましたが、給料は無く住居と食費は支給されるという待遇でした。そこでインタープリテーションのプログラムやハイキングツアーの実施、ビジターセンターでの接客や案内、生物学者や研究者とのフィールド調査、トレイル整備や補修などパークレンジャーの日常業務に携わっているうちに、これは天職に出会ったと直感したんです。

ですがパークレンジャーは公務員なので、なるためにはアメリカの市民権が必要でした。アメリカの市民権を得るということは日本の国籍を放棄しアメリカ人になるということですので躊躇はありましたが、人生は一度きり、この天職との出会いを実現するチャンスを逃したくないという一心で一年かかって市民権を２００４年に取得しました。しかし、パークレンジャーの正規雇用のポストは少なく、最初の頃は季節雇用で他の仕事をしながら生計を立てていました。

そんな中、アメリカ人として、違う角度から経験を積もうと思い、アメリカ政府のボランティア派遣制度 Peace Corps（平和部隊）（注2）を活用して2年間アフリカでインタープリテーションや環境教育分野のプロジェクトに携わりました。帰国後、アフリカでの経験も評価に加わり、晴れてパークレンジャーの正規職員として雇用されました。

なので僕は計画的にパークレンジャーになったわけではなく、やりたいこと、自分の直感を信じて進む中でジグザグしながらもパークレンジャーという仕事に出会い、今があるという流れです。

オリンピック国立公園でインタープリターのチームスタッフ

仕事の内容や魅力

――パークレンジャーの仕事について教えてください。

パークレンジャーの主な業務はビジターセンターなどの施設管理や運営、インタープリテーションのプログラム提供、景観整備など色々ありますが、自分の場合はインタープリティブ・レンジャーとしてインタープリテーションを18年担当してきました。

これまでにグランドキャニオン国立公園やミュアウッズ国定公園など9箇所に赴任しました。インタープリテーションのプログラムではビジターセンターなどを拠点に来訪者に対して自然だけでなく歴史、科学など、その地に関する様々なことを紹介します。ビジターセンターの屋内展示を使った解説や、トレイルを歩きながら案内したり、絵を描くワークショップを行ったり、プログラムの内容は様々ですが、常に来訪者一人ひとりにとっての意味を見つけてもらうことを意識しています。自然でも歴史でも、その環境について自分にとっての意味、理解を見出してもらえた時、この仕事をしていて心底良かったと思います。

グランドキャニオン国立公園で大渓谷形成の解説

ミュアウッズ国定公園のボランティアスタッフと

――仕事は室内と野外とどのくらいの割合？

18年の中で最初はほぼ１００％野外でした。パークレンジャーになりたての頃はトレイル整備に携わりましたが、山中に6日間連続で寝泊まりをしながらトレイルを補修したこともあります。その時は本当にアメリカの広大さに圧倒されました。その後、ビジターセンターの運営と野外でのインタープリテーションのプログラム実施を担当していた時は6対4くらいで室内と野外でした。直近は管理職だったので、ほぼ１００％室内でした。

――日常業務で大変なことは？

インタープリテーションを主業務とするパークレンジャーの仕事で大変だと感じるのは、実は国立公園内で発生した事故対応や怪我人の搬送なんです。アメリカの国立公園はとにかく広く、東京都がすっぽり入るような大自然の中でプログラムを提供している最中に事故に遭遇したり、ハイキング中の怪我人の対応もあります。応急処置の訓練を受けた警察官が国立公園に配置されていますが、人数が限られているので、救急車が到着するまでの間は私たちが現場の責任者となって対応することがよくあります。

――辞めようと思ったことは？

何回もあります。パークレンジャーは人気の職種ですし、アメリカ人にとっては敬意をこめてヒーローのように思われています。自分のように英語が訛っているような人間がパークレンジャーをしていることに対して、ネガティブなエネルギーをぶつけてくる人もいます。何度も嫌なことはありましたが、それでもやはりいい人に囲まれて助けてくれる人もいますし、やり続けなければいけないと信じてやってきました。

インタープリターの役割を模索しながら知識や技術を学ぶ

――インタープリテーションの知識や技術はどのように習得されてきたのですか？

インタープリテーションは人に何かをわかりやすく伝えるコミュニケーションのアプローチの一つですが、アメリカの国立公園では来訪者の楽しい経験を重視したインタープリテーションの手法に重点を置いています。私の場合は、国立公園でのインターンやアフリカでのボランティア活動、日々の業務から得られる経験を通じてインタープリテーションの技術を磨いてきました。特に最近心がけているのは、世の中の動きにあわせてインタープリテーションを実践することです。これまでは来訪者が自然を理解するために、自ら調べた自然や歴史等の情報を、自分の解釈をまじえながら説明してきましたが、今は情報が溢れていて、インターネットなどから誰でも容易に情報を入手できる時代なので、情報の価値が薄れてきています。なので、一方的に情報を提供するのではなく、来訪者と対話をしながら、彼らが自然の中で無意識的に求めているもの探している体験を引き出せるようなインタープリテーションを実践しています。演劇に例えると、国立公園を訪れる来訪者が主役で、私たちインタープリターは名脇役といったところでしょうか。世界が変われば、インタープリテーションも変わるので、目的やインタープリターの役割を模索しながら学び続けています。そうでなければ我々のいる意味がなくなりますからね。

ミュアウッズ国定公園でビジター対応

懐が深いアメリカの自然の姿

――最後にトッドさんにとってアメリカの国立公園の魅力とは何ですか？

アメリカは歴史的にみると比較的新しい国ですが、先住民が自然を大切にしながら保ち続けてきた場所です。原始の地球を感じられる雄大さと自然本来の姿がありのまま残されているのがアメリカの国立公園の魅力だと思います。また私にとっては図書館のような存在でもあります。情報は景観の中にたくさんあります。これまで興味がなかったことに関心が湧き、学びの場と機会を提供してくれた場所でした。懐が深い自然、それがアメリカの国立公園の魅力だと思います。

ありがとうございました。

トッド久一
大阪府出身。2004 年にアメリカの市民権を取得。これまでにグランドキャニオン国立公園、ミュアウッズ国定公園など 8 か所に赴任。現在はニューメキシコ州のオーガン・マウンテンズ・デザート・ピークス国定公園でパークレンジャーとして活躍中。

注1）国定公園（National Monument）は国立公園とは設立されたプロセスが異なる。国立公園は議会が指定、国定公園（National Monument）は議会の承認を得ず、歴史的、科学的価値のある場所を大統領が指定。

注2）日本青年海外協力対の米国版で、米国政府が途上国へボランティアスタッフを派遣するプログラム。